

西アフリカの印象

サヘルの国ニジェールを中心に

山口 博一

コートジボワールとニジェール

1990年2月の後半、思いがけず国際協力事業団の国際協力総合研修所から西アフリカのコートジボワールとニジェールに約10日間の調査旅行を依頼された。自分の守備範囲はもともと南アジアなのでそれ以外の場所には余り出かける機会がない。遠い西アフリカともなれば尚更である。私がほとんど欣喜雀躍の思いでエールフランス機に乗り込んだこともよく了解いただけるだろう。

この両国は、これだけをもってアフリカ数十ヶ国の典型であるなどとはとてもいえない。しかし、西アフリカ、それも仏語圏を取ってみると、ある程度はことなるタイプを表しているのとれる。コートジボワールの方は、海岸国で、フランスの影響が強く、ADB（アフリカ開発銀行）などの国際機関が数多く集中し、「プラトー」と呼ばれる近代的な市街地もあり、最近までは成長の面で仏語圏諸国のペースメーカーとなってきた国である。

他方ニジェールは、7ヶ国に境を接する内陸国で、対外関係や国民統合の上でも多くの課題を抱える上に、代表的なサヘルの国の一つでもあって、大きく言えば人類が砂漠の南下を防ぎ止めるべき大切な戦場の一部を構成する国である。

コートジボワールの首都アビジャンには日本の大使館もあり来訪者も多いが、ニジェールはこの大使館の兼括国となっている。従って、ニジェールには日本からの来訪者も格段に少ない。

以下では、日本でより情報の少ないニジェールに絞って、ここでの滞在中に見聞したいくつかの事柄を中心に私の印象を述べてみよう。

ニジェール川のほとり

ニジェールの首都ニアメでのホテルがニジェール川を見渡せる場所にあったのは感激であった。そのホテルを拠点としながら、我々はわずかの期間であったが、ニジェール政府の各省庁、ユニセフなどの国際機関、アメリカやカナダなどの援助実施機関の現地事務所などを連日のように訪問して、援助の理念と実際について、特に今回の我々の中心テーマである貧困問題に引き寄せて議論した。

ついでだが、コートジボワールでは基本はフランス語でもある程度は英語が通用したが、ニジェールではほとんど通じなくなり、いよいよ仏語圏の深奥に進入したとの感を深くした。いかに、「フランスの栄光」やフランスへの留学生制度によるものとはいえ、これほど多数のアフリカ人に旧宗主国フランスとの、また国内諸民族間の関係語としてのフラン

ス語を話す習慣を植えていったことはちょっとした驚異であった。

サヘルの印象

私は物事の判断の基準をかなりインドにしているので、アフリカを見るにもついインドとの比較になる。コートジボワールはさしずめインド西南端にある水が豊富で清潔な緑の美しいケララ州であろう。これに対し、雨が少なく半砂漠状態が目立つニジェールは、ケララよりもずっと北のパキスタンに近いラージャスターン州を私に思い出させた。もっとも、インドの人口密度はアフリカのその比ではない。インドでは人をかき分けながら歩くという感じだが、アフリカでは人につかるといことがまぎらない。

一日、我々は事業団のUさんの車でニアメから遠出をさせてもらった。少し郊外に出たところの道端で農民が薪をうず高く積んで買い手を待っている。パリ・ダカ・ルートの一部となったという道路を北上するにつれて、草木は灌木だけとなり、砂地が多くなる。灌漑がないから耕作はまず見当たらない。ニジェール川からそう遠くないのにである。一方では放牧している家畜の多いのに驚く。主に牛、ろば、羊、山羊だが、山羊があちこちで灌木に前足をかけて伸び上がり木の葉を食べているのが強く印象に残った。

これは要するに絵に書いたような環境悪化の進行の図である。過剰放牧とともに北方からの砂漠化の脅威は増大するに違いないと思われた。

しかし、続いて我々がお会いした

青年海外協力隊員のOさん（女性）によれば、今は乾季だから確かにそう見えるが、雨季には、あたり一面に芽が出て緑一色になり、乾季とはすっかり様子が一変するという。乾季だけではなく雨季にも訪れる必要があるということだろう。

ちなみにOさんは、2月で在任がちょうど1年、村民に野菜作りを指導している。頭が下がる活動である。丹精込めて作った作品をろばが食べないようと野菜畑の回りに厳重な囲いを作っていた。

ユニセフのB女史

ニジェールでの最後の面会相手はユニセフの同国事務所長B女史であった。彼女の説明はこの国が、またある程度ほかのサヘル諸国が、当面する諸問題を的確に指摘したものと私には思えたので、その趣旨を略記してみたい。

ユニセフの活動におけるプライオリティーの第1は予防接種だ。6種のワクチンの接種率はまだ16%である。動物の2種接種の割合のほうが高く80%である。国土が広く、遊牧民もおり、バイクでは間に合わない。ロジの費用が大きい。今年中には16%から50%にあげたい。

第2は食糧、栄養だ。これについてはいうまでもなからう。

第3は飲料水である。井戸やポンプの管理が問題になってくる。婦人を含む字の読めない人にどのように管理を教えるかということである。

第4は教育である。目標は婦人である。妊婦を危険から守ったりいろいろすることが多い。家族法が通つ

て結婚年齢が上がり、一夫多妻制がなくなることを望んでいる。

最後の点に関して彼女は、日本人には理解できるだろうが伝統の力は強い、ここの政府はイスラムとの妥協を計っている、として、政府の態度が婦人の地位の向上を妨害しているとのめかした。

なお、各国で取られている構造調整政策については、それが防衛費や大型プロジェクトには影響がなく保健などへの支出をカットするとして批判的であった。

ICRISAT

B女史のブリーフィングは自分の仕事を的確に理解している実務家によるものとして非常に有益だった。

ニアメの町外れにあるICRISAT（半乾燥熱帯地域国際穀物研究所）のサヘル・センターを訪れた時の印象で少しそれを補ってみよう。

このICRISATはインドのハイデラバードに本部を持つもので、サヘル・センターが出来たのはまだ数年前のことである。所長のイギリス人G氏はアフリカとインドに合わせて32年の滞在経験をもつ人で、その下にアフリカや欧米から多数の研究者がいる。このセンターが中心にしている仕事はソルガム、ミレット、落花生など5つの作物の遺伝学的改良ということである。

我々は多くの質問をし、得るところが多かった。例えば、この地域では60年代から、特に作物にとって決定的な8月の雨量が減少していて、それが砂漠化につながっているという指摘があった。また、森林が飼料、

防風、燃料、建築材料など多面的に重要であることが確認された。その中で風による土壌の浸食という問題はアジアを専門とする私にはなじみの薄いことであったといわなければならない。

その一方で、地表からの蒸発が少なくなっているから雨量も減ったのか、あるいは、このあたりの植物が家畜の過剰放牧に対してあとどれだけもつか、に対しては、どちらもはっきりした答えはないということだった。

また、余り肥沃でない土地にも人が住むようになっていて、農民が遊牧民を自分の土地に呼びこみ、農民は遊牧民の家畜から有機肥料を得、遊牧民は農民から家畜の飼料を得るようになって、砂漠化のために農民と遊牧民の関係が深まっている、という興味深い観察も聞いた。

旅行を終えて

わずか10日の見学旅行めいた調査だけでアフリカの課題を論ずるつもりはないが、アフリカの当面する諸問題は、アフリカの持つ特殊性を越えてかなりの一般性を持つのではないかと、というのが私の印象である。この問題をつき詰めれば、これまでの発展の道筋とはことなる代替的シナリオということにつきあたるだろう。その場合、おそらく、環境の保全と再建、保健衛生への配慮、および教育が三つの大きな柱となるのではあるまいか。

（やまぐち・ひろいち／地域研究部）